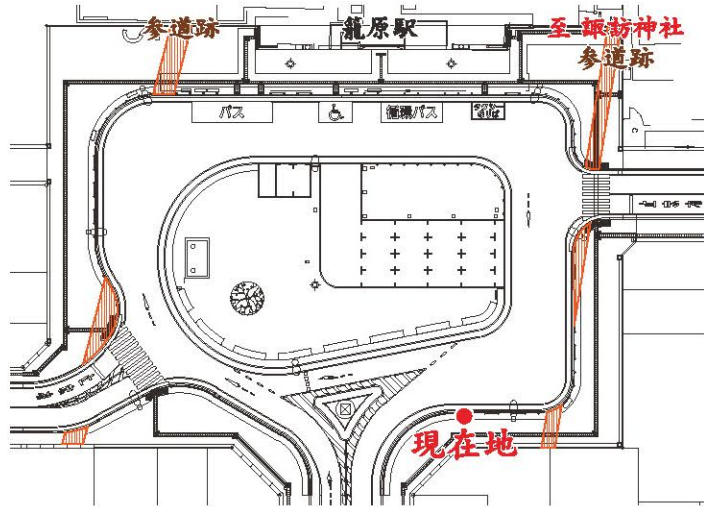


籠原の歴史と諏訪神社 — 時代を超える籠原地域の郷土をめぐって —

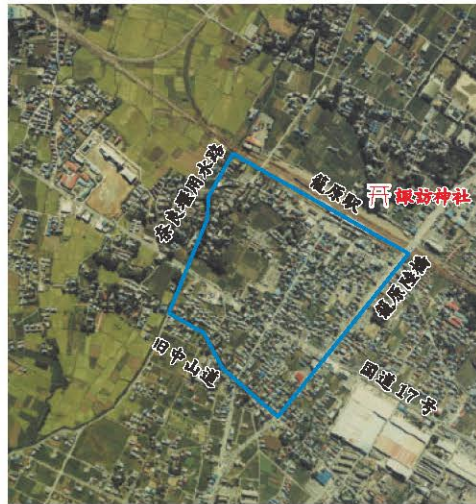
籠原の地名は、当地の古い字名である「籠原」（こもりはら）に由来している。「籠り」とは沼地の意であるとされ、また、水を分配する水分（みくまり）の神が住む所で、「みくまり」から「くまり」「こもり」になったともいわれている。これらの伝承は古代の当地の様子を連想させるとともに、沼の岸に諏訪神社が祀られたことを想起させる。現在の籠原駅北側にある「籠原裏道跡」や「籠原裏古墳群」からは、旧石器時代の遺物、縄文時代の土器、多角形墳などの特徴的な墳形をした古墳、平安時代の住居跡などが発見されていることから、古くから当地に人々の生活があったことが分かる。

当地は、古くは畑村と称していたが、慶長年間（1596-1615）に奈良堰用水が新設された後に、新堀村と改称している。諏訪神社の建立時期は明確ではないが、江戸時代中期には地域の信仰を担う神社として所在していたことが推定される。拝殿社号額の裏には「防蝗攘疫（ぼうこうじょうえき）」と記され、当社が稲の神として信じられてきたことを物語っている。

籠原駅北側には熊谷の歴史と深く関わる中山道があり、京都と江戸を結ぶ街道として政治経済と文化の行き交う場所となっていた。当初、諏訪神社はこの中山道につながるように参道が作られていたと伝わる。明治16年（1883）、上野と熊谷間の鉄道が開設し、翌年には高崎、前橋まで延伸された。これにより、鉄道が諏訪神社の参道をまたがることになり、現在の参道の経路に整備された後、明治42年（1909）、籠原駅が開業した。昭和時代には、本殿の改築が行われ、籠原裏古墳群にある小塚を正面に見るように建物の位置が調整されたとされる。このように籠原の歴史は諏訪神社と地域内の様々な変遷と密接に関わり、現代における当地域の土地区画整備事業とも結びついている。



籠原駅北口駅前広場



昭和55年撮影 籠原駅上空より



旧籠原駅舎